

# 我が國上代風俗と印度古典

足利惇氏

本論の要旨は昨年己に我が帝國大學の夏期講習會開催の際夜間の公開講筵に於て述べたものであるが、更に修補して文献材料を蒐集して、「史林」の餘白を借りて同好同學の世上識者に問ふこととした。定めて意見を異にする人々も多かる可しと思ふが、本紙上に於いて匡正の意見を發表せらるれば幸甚と思ふ。

印度と我が國とは共に地理的・歴史的・乃至宗教的に於いて非常に相違ある國柄であるが、古代印度の立法者の記録（蓋し、法とは現今の言ふ法律の意義ではない）乃ち所謂、祭政一致時代に現はれたと見る可き風俗習慣又は信仰にして、我が國のと頗る相近似した問題が少くない。我が國は佛敎國であり、印度は世間周知の如く佛敎の發祥地であるが、佛敎が印度に發生し其の地に隆盛を極めたのは、印度に於いては既に祭政一致の時代ではない。又佛敎が印度から我が國に傳來した經路を辿つて見ると

その經過し來つた國々の宗教風俗等を攝取又はこれと混合した結果、純粹に「ガールウタマシツダールタ」、即ち釋迦牟尼佛が西曆紀元前六・七世紀乃至四・五世紀頃に「ガンドス」河の沃土に説けりと言はるゝ敎とは、大いに趣を異にしてゐるものがある。道教・儒敎・波斯敎等の分子が、形を變へて佛敎中に竄入し、我が國に傳來したのであらう。是宗教上相違ある所以である。

元來、宗教とは座臥・進退・飲食・衣服・住居等、人間生活の全般を支配するものであり、又支配しなければ宗教と言ふことは出來ぬ。學說ではない、哲學ではない、又學術ではない。その何々宗たるを問はず、自己の誕生し生長し來つた民族の中で、その風俗習慣を、ともかくにも護持しながら生活して居る人は、その國に於ける善良な國民であり、又それに背けば自らは不快を抱く人は

その民族の環境と一致して、一體となつて居ると言ふことが出来る。かゝる人々を、古代印度の立法者は「アーリヤ」(Arya)と呼んで居る。佛教の中にて善男子クラウストラ(Kṛāśāstra)善女子クラウストリ(Kṛāśāstrī)と言ふは即ち是である。印度では古も現在も或る種の階級を除いた外は、宗教即國であり、國は同時に宗教である。故に拜火教 (Zoroastrianism) の教徒の「パーシー」(Parsee)族は「ボムナイ」(Bombay)を中心として英國の統治下にある國土に居住しながら、拜火教を以て自己の國となし、又印度教徒は印度教 (Hinduism) を國として自己の生活も是と一致して居る。又食物の點に就いて見れば、印度教徒は豚肉を攝り牛肉を忌むで牛を殺す者はその罪親殺しに相當る者と觀る。この信條は一つの鐵則であつて、是を犯せば自己の國を喪失したのと同然である。之に反して、回教徒は牛肉を喰ふが豚を不淨視する。故に兩教徒の衝突は同一の英國人支配の下に居りながら、年中行事のやうに行はれ、局外第三者から見れば些細な事に思はれても、その教徒自身となつて見れば、その所屬の宗派、即ち國の侮辱された所以であり、

引いては自己の侮辱された考が募り募つて、遂にはよし武力に訴へてもその尊嚴を維持しやうとする考が、屢々衝突を起すのである。尤も千萬の次第と言はなければならぬ。

さて一般に國とは國土・山川・人民をその構成要素となすが、同時にその國に生息する民族がその環境に相應した風俗習慣を持たなければ、完全な國家と言ふことが出来ぬ。この意味に於いて、遊牧の民族を指して支那人が行國と言つたのは、理由のあることで、又世界の某國の如く、國土廣大、富源無限、上には賢明な支配者を戴いて百般の施設如何にも燦然として居るやうでも、一定の信仰風俗習慣がないために、國中更に國があり、即ち一國は事實上數個の國である。印度が嘗て「アーリヤ」民族の國であつた頃、アーリヤ風の風俗習慣がその國土に發生し、是に依つてその民族は一定の規範に入り、遂にその中から立法者が出現して、法律・言語・文學・哲學・乃至藝術が生れたのである。その言語の最も古いのは「サンスクリット」、即ち梵語である。その文學の最古のものは

「ヴェダ」(Veda, 吠陀)である。その立法者は果して誰人なるか不明なるも、現在に傳つて居る者は、皆神仙(Rshi)と名けられる半神半人の人々を言ふので、支那に言ふ聖人はこれである。哲學藝術は其の起源を共に神仙に假托して居るが、其れを作つた者は、矢張「アーリヤ」民族の眞善美を發揮した天才の所爲であつて、何れもその國土環境に順應した風俗習慣乃至信仰の發露と言はなければならぬ。

翻つて、我が國の古典は甚だその量に乏しい。又その最古のものを以てしても、尙支那印度に比較して遙かに後代の作に屬することは明かである。然し、その中に現はれたる風俗習慣乃至信仰と、之に加ふるに未だ成文とならざるもの、換言すれば、文字を以ては現はされて居ぬものが、今日も依然として存在し、現に守られてゐる風俗習慣乃至信仰となつて居る。比較民族學の見地からして、我が國は支那は勿論、印度の古文學たる「ヴェダ」中に現はれ來るのと同じのものがある。古代印度の神仙時代に存在した風俗習慣が、我が國上代にも在つたのを

知れば、今日我が國を神國或は神代ながらの國と言つても決して故ないわけではない。

多くの例の中で、我が國に盆踊りの風習があるが、是は萬靈供養の祭をする所謂盂蘭盆會の式と一般に信ぜられてゐる。然し、眞實は我が國の古俗歌垣が、偶々印度から東洋諸國を経て入つて來た死者追薦の風俗と合一したものである。歌垣の風習は遙か以前から我が國に存在してゐたのである。盂蘭盆會の式は印度家族制度の嚴重な時代では、子孫特に羅馬法に所謂男系 (agnatus) の子孫が祖先の祭を營む可き義務、或は權利があるので、所謂「サピンダ」(Sapinda) の者でなければその資格がない。若しこの祭を怠つた時には、祖先は倒懸地獄に墮ちて倒まに懸つて苦しむ、この恐怖危険から救ふ爲めにその子孫特に「サピンダ」が、祖先の生前と同然に「ピンダ」(Dinda 握飯)を靈に捧げる風習で、是は家族制度の維持上最も必要な事である。相續法の思想も是から生ずるもので、羅馬法中かゝる思想の下に類似の遺産相續法の制定を見たのは注意す可きことである。盂蘭盆會は家族制度の根本

思想を一切生物の魂に及したものである。佛教の中で、目蓮（目犍連）尊者母を救つたことにかけて、佛教中にその話を攝取してゐるが、この話は戯曲・物語に作られ、北は西藏・中央亞細亞、南は錫蘭・緬甸・安南、或は支那に迄流布してゐる。現に我が大學には東埔塞文字で書いた古寫本があるがその中にこの話も載つてゐる。又夜行はるゝ歌垣の風習は、出羽の國羽黒山等その他各地にそれを催す山があつて若い男女が相集つて配偶者を求めたのである。時は正に農事が閑散で、この種の會合を催すには好適時と言へやう。羽黒の名稱は正に未婚の女子が、配偶者の定つたことから齒を染めたのであらう。又歌垣山の名が各地にあつて、和歌を讀み合ひ、男女自ら己れの意志を相手に通じた極めて高尚且つ優雅な催しであつたことは、日本書紀卷十六、小泊瀬稚鷦鷯オホトセノササガサキ天皇の歌場の衆中に立ち給へる條を見ても解る。

こゝに注意す可きは、かゝる祭禮が神社中心として行はれ、且つ、晝間よりも夜間に行はれた事は、是亦古代印度の風俗と相似た所である。衆知の如く、印度の「アー

リヤ」族はその原住地は不明であるが、北方から移住したものとすることは疑ふ餘地がない。而して晝間よりも夜間を以て公の會合に適したものとして尊重したことは北方民族の通有性である。「ゲルマニア」民族の生活を、史家「タキッス」(Tacitus)は「夜を以て日を數へる」[“Nocturnum numerum, ut nos, sed noctium computant.”—Germania]と言つてゐるが、戰鬪の準備、將帥の推薦の時は好んで夜間會合して之を行つてゐる。夜を以て日を數へるこの名残は“lornight”と言つて、“fourteen days”を意味するやうに、是は古い表現法である。印度に於いても夜[*raatī, rātri*]は同時に日を數へる。「ヴェダ」では最も然りである。翻つて我が國の古事記中、素戔嗚尊が姉君に在す大日靈貴、即ち、天照大神に向つて無禮を爲し給ふた時、八十萬の神々が天安河邊に會合せられて懲罰の計を議し給へるのは、恰も大神の天石窟に入りまして暗黒の時に當り居るのは、注意す可き事ではあるまいか。

又、伊弉諾尊が、御子迦具土神の首を、十拳の劍をもつて斬り給ふた時、その劍に着いて居た血液が、種々の神

々に變化してゐる。又迦具土神の頭・胸・腹・陰・右手・左手の身體の各部が、種々の山又は山神となつてゐる。是は「リグヴェダ」(Rigveda)の十卷の Purusa-Sukta中、「フルシャ」の身體が種々の物となるその思考の型と非常に類似して居る。恐らく我が國も以前は、上世印度と同じく祭(yajna)が種々のものを生み出す力があると言ふ信仰の存在した時代があつた痕が認められる。「リグヴェダ」中、Purusa-Suktaの詩は、人の知る如く、四姓(varna)の成立の起源を神話的に説いた詩で、婆羅門は頭から、刹帝利は腕から、吠舎は腰から、首陀は足から生じたと言ふ詩であるが、是が「リグヴェダ」中、比較的新しいものに屬するとの定説があるにしても、犠牲の各部分から種々のものが生ずると言ふこの考は、餘程古いものと言はなければならぬ。唯我が國のみならず、「スカンデナヴィア」の「エダ」(Edda)文學中にも是がある。

又次に、伊弉諾尊が伊弉册尊を黄泉に訪ね給ふて、今世に歸るやうに勸告された時、伊弉册尊は「妾は已に黄泉の物を食ひし故に歸ることを得ず、明日黄泉神と相談

さる可し。されど妾を見る可からず。」との意を宣ひ給ふた。伊弉諾尊は恐怖を抱いて逃げ給ひ、伊弉册尊は自己を辱めた者として後を追ひ給ふた話がある。是は恰も希臘神話中、Orpheus がその妻 Eurydice を慕つて Hades の國に行つた話とよく似てゐるが、元來この死者の魂は頗る恐しいものである。この死者の魂に取憑かれると、この世に於いてさへ禍を受けると言ふ考は、何れの古代民族でも共通な思想である。古代印度では死者の親戚は、葬式を済してから、その死者の魂の上昇し來るのを恐れ、その埋葬の地に濠を設けて、その歸來するのを防ぎ、自分達は後を振返ることなく、直ちに附近の河に行つて禊の式を行ひ、或ひは、神聖な話や呪文で身體を清淨にすることになつて居るが、精神は全く相同じいものがある。今日我が國に於いて、死者の親戚は喪に服する習であるが、元來、喪とは悲しみの意味ではなく、實は穢から出て、穢を受けて居るが故に、他に對して謹慎するを言ふのである。祭政一致の時代では、神に仕へる者は、清淨な身の者だから、當然死者の緣に近い者は神事を行

ふことを禁ぜられたのは言ふまでもない。この精神は印度の古代では特に顯著である。

次に、近親者又は其の人に親しい人が殉死する風は、我が國の記録では、崇神天皇の御宇、野見宿禰の獻言を以て之を廢せしめられたことになつてゐる。然し、事實上、元龜天正の戰國時代に到つても、殉死の風が必しも廢滅した譯ではない。印度では「サテイ」(Sati 貞女)の風習があつて、英國政府が之を禁止して居るにも拘らず、往々行はれる。「サテイ」とは、夫が死んだ時、妻が夫の屍體を燒くその火の中に入つて、追死するを謂ひ、又これは其の家の譽となる所以である。この殉死の風は、北歐の Norseman に於いて、酋長が死んだ時、その人の持物は残らず、又臣が死んだその塚のあることは、考古學者のよく知る所である。泰西の學者は、「サテイ」の風習は「ヴェダ」の文學に根據を有せずと言ひ、印度學者は有すと言ふて居るが、文獻上の根據の有無は吾輩の間ふ所でない。現に「サテイ」の風俗は印度に存し、又、古代より繼續して來たもので、「スカンデナヴィア」其の他にあ

つたのを見れば、印度でもあり得ることで、當時の社會組織、又は家族制度と密接の關係のあつたこと、思ふ。我が國では、事實上、頗る後世に殘つてゐるのを見ても解る。冠婚葬祭に就いてはその民族は國土によつて相異なるけれども、その精神に於いては何ら相違がないから、材料及び環境の相同じからざる爲め、發現の方法には自ら特殊なる點はあるが、又甚だ近似してゐる點もある。

女子が結婚して妊娠したものを見做して不淨とし、同時に凶神が禍して胎兒が流産する恐れが無い爲に、妊娠から出産に到る迄、種々の式を行ふことがある。是は儀禮でなくて宗教上の行爲に屬し、これを怠る時はその咎を受けると言ふ思想は、是古代印度と我が國とに共通する處である。Kandhasutra 中に、妊娠隔離の爲めに更に住居を新造し、其處に住ましめて清淨な婆羅門が妊婦の禊の式を行ふことが書いてある。この風習は今日尙ほ我が國の邊陲でも存して居るが、現に古事記中、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の話の如きは古代風俗の明かな描寫と言ふことが出来る。婦女子はそれ自體既に不淨である。宗

教上不淨である、従つて政治上無能であると言ふ思想は祭政一致の思想ある國では當然の歸結である。又それに附隨した婦女子の不淨を清める式は、時には簡素であり或は複雑なことがある。例へば、月經の時には決して神前に趣かないこと、又已むを得ない場合には、一定の神聖な場所を通過することに依つて清められる風習は、我が國も古代印度も同一である。我が國に於いては婦女子に限らず、或る危険を伴ふ山獵・海漁乃至航海の如き事業を行ふに當つて、山の入口又は海岸で、山なれば狩坐カウシヤを祭を營み身を清めて山神に祈り、海岸なれば邊近い神社の柱に開いてゐる穴を通過して自ら清淨となつたと言ふ信仰がある。山神に祈ることに就いては我が國の「峠トボゲ」と言ふ語は「たむけ」の義で、山の入口に手向山のあるのを略して峠と言ふのである。小倉百人一首中、管公の和歌も是の意味である。印度では山に入る時、航海をなす際、戰爭をなす折の如き危険ある場合には、必ず身を清淨にすることが必要であり、婆羅門をして祈禱せしむるのである。又婦人は元來不淨な者だから、能ふ限り危険なこ

とに立入ることを避く可きである。印度大叙事詩「マハーバーハタ(Mahabharata)」の挿話中、最も初學の人に讀まる「ナラ」物語と言ふのがある。此の中に於いて隊商が出發する前にその保護神マニブハドラ摩尼跋陀(又は摩尼跋捺羅)・(Manibhadra)に祈禱することがある。「マニブハドラ」は眞言の金剛界曼陀羅中にその名あり、又金光明經中にもあるが、名より見れば珠の妙なる神の意である。又「ナラ王の妃「ダマヤンチー」(Damayanti)」がその夫を尋ねんとて隊商中に加はつて居た時、或る夜、その隊商が象群に襲はれたのを、隊長はこの禍は女子が隊中に在るからだとなつて、妃に危害を加へんとした話がある。歴史的事實を指せば、西曆五世紀の初頭頃、かの法顯三藏が、獅子島(Sion)から南海を経て支那へ歸る路次に於いて大暴風に襲はれた時、舟中の人々は、この禍は沙門の如き者が同船してゐるからだと言つて、危く彼を殺さうとしたことが載つてゐる。婆羅門の眼から見れば宗教を異にしてゐる故に沙門は不淨なものであるわけである。(法顯傳。―諸婆羅門譏言。坐載此沙門。使我

不利遭此大苦。當下比丘置海島邊。不可爲一人令我等危  
險。法顯檀越言。汝若下此比丘亦下我。不爾便當殺我。  
如其下此沙門。吾到漢地當向國王言汝也。漢地王亦敬信  
佛法重比丘僧。諸商人躊躇不敢。又三國時代に日本から  
支那へ渡る時には、必ず清淨の人が舟に乗り、安着の折  
には同船の人々は彼にその報酬を與へた。(魏志倭人傳。  
―其行來渡海詣中國。恒使一人不梳頭不去蟻蝨衣服垢汚  
不食肉不近婦人。如喪人名之爲持衰。若行者吉善共願其  
生口財物。若有疾病遭暴害便欲殺之。謂其持衰不謹。)文  
中、生口とは奴隸の意である。倭建命の後、弟橘比賣の  
御入水の話も或は亦かゝる見地から觀ることも出來やう  
かと思ふ。

神聖觀念の強烈なことは、古代印度我が國共に同一で  
あつて、婆羅門は今世に於ける神なりと言ふ考は法典中  
に現はれてゐる。婆羅門は王者を作り又助けるもので  
清貴の家から出たものでなければならぬ。又結婚の式そ  
の他築城建都の際は、犠牲又は供物を神に供へる。犠牲  
とは神と人との媒介をなす爲めに死ぬ者で自己自ら神に

近づく資格を持たねばならぬ。今日世に犠牲々々と言つ  
て自ら損して他を益すること、同義に用ひられるが甚だ  
片腹痛き申分である。犠牲又は獻供の思想は何れの國で  
も同じ事だから宗教上清淨なことを要する。その人又は  
動物或は植物たるを問はず、神に供へらるゝものは凡て  
神聖化されたものでなければならぬ、本來神聖化せられ  
たものは神である、せられざるものは神でない、故に神  
とその性を異にする譯である。左傳に神不歆非類とはこ  
の意味に解す可きものであると信ずる。故に祭事には是  
を行ふ爲めに清貴な特殊階級を必要とするに到る。是實  
に古代社會に於いて神聖階級存在の理由であつて、従つ  
て社會から尊敬を受ける所以でもある。印度では王者は  
婆羅門に封土を與へる。之を *Agahana* と言ふ。俸祿を  
與へる、これを又 *Agahana* と言ふ。「アグラハラ」と  
は字義から言へば「最初にとるもの」と言ふ義であるが、  
ただ雜句語の *pinncps* に似た所がある。「プリンケプス」  
は最初にとるもの、義であつて、戦勝の際、分捕品又は  
俘虜の中で將帥が最初に自己の欲するものをとる資格あ



る人を指すのであるが、やがて王者又は將帥の義となつた次第で「ホメロス」が「イリュアッド」の最初に歌つて居る「ペロイス」の子の怒は、己が「プリンケブス」たる「アガメムノーン」に己が愛する美人をとられたからであることは人の知る所である。是は古代希臘の話であるが、「アグラハール」は最初に婆羅門に獻する土地又は穀物であつて、日本で言へば神社に佛閣に毎年秋に獻納する御初穂 *Prinice* 又は戰勝者より寄進する神領又は寺領の如きものである。神佛の加護により、陰陽交泰、國土安寧、五穀成熟、所願成就した報謝の意味で、神佛又は神佛に奉仕する神聖階級に對し、獻納するのである。

又、我が國の上代と印度の上代乃至羅馬の古代でも家と言ふ觀念は近代と大いに趣を異にして居る。上はその始めを知らない神から、以下連綿たる子孫に至る迄一貫一括して家と言ふのである。而して家の象徴は火である。この火は一家の長即ち佛教で謂ふ長者 (*the Upajana*) が絶えず祭るもので、この火で象徴された祖先の靈がその家を保護するのである。故に如何なる家でもその家に屬する

一定限の個別的の火があつて、家の長者が是を祭るから家を異にすれば自ら火の性質も違ふわけである。婚儀の際、印度では新郎は新婦の手を執つてその家の火を廻り (*Paringana*)、又、我が國では嫁は夫の家の火を跨ぐ習慣があるが尤なことである。(北史倭國傳—婦入夫家必先跨火乃與夫相見。)又我が國古代の風俗では必ず一定の宗教的に清淨な方式に依らなければ火は清淨でないとする、故に他家から火を自家に貰ひ來ることは古から忌む所である。現に出雲大社の祭事には木を擦つて火を發する。印度では *ghee* を揉んで出した火は神聖な火で、これに附帶した極めて混入つた儀式は印度乃至波斯文學にさへ見えて居る。この點は我が國も印度も同事である。

天の磐戸を開いて天の手力男の神が天照大神の御手を執つて磐戸から引出し奉り、布刀玉の神が端出之繩 *シロクメメナ* を界して後に歸り給はぬやうに言つて居る。是は *ウツヒ* の設定であり今日の標繩 *シメダ* である。乃ち一定の神聖な場所を設定してその以内に入ることが出來ず、入つたら所謂を受ける義である。この考は印度上代に發達した「ブラーフ

「マナ」文學 (Brahmana) に發露してゐる神聖觀念、儀式、*Mane* とその精神に於いて共通な所がある。

欽明天皇の御宇十三年に、百濟の聖明王が佛像を獻じ之を奉ず可きや否やを群臣に問ひ給ふた時、物部大連尾與、中臣連鎌子等の反對した理由、即ち我が國は百八十神の支配し給ふ國で佛は蕃神である、改めてこの蕃神を拜すれば恐くは百八十神の怒を致して禍をなすだらうと言つて居る。この意見は古代民族の信仰を最も率直に發露したもので、我が國に限らず、希臘羅馬の古代に於いても、矢張國土の守護神があつて、守護神の保護によつて國土が安泰であり得るのである。自己の屬してゐる國の神は自分達を保護するが、他國の神は他の民族を保護してゐる。自分の民族の守護神を否定してゐないと同時に他民族の神を認めて居る。この思想は民族の戰爭中にも見ることが出来る。古代國家に於いては何れの民族でも戰爭は經濟上或ひは政治上の理由から起つたにしても、戰爭の行爲それ自體は神の業である。民族同士の戰の外にその民族の守護神も參加すると言ふ考へは、到る處古

代文學中に現はれて居る。「ホメロス」の歌ふた「トロイ」戰爭中、その「トロイ」人希臘人の外に夫々の神が參加して居るが、疫病飢饉等は神又は惡魔の所行であると言ふ考、これが歴史時代、印度は勿論、希臘羅馬の歴史でも古代の部分に屢々現はれてゐることは今更言ふまでもない。欽明天皇の御宇の時疫病が流行したのを、是靈神たる佛像を拜したのに基くものなりとし、難波の堀江に投じて神々の怒を宥めたと言ふ信仰は、當時日本國民の性情を遺憾なく發露したものと云ふ。是は羅馬が「ゴール」人の爲めに破られ困しめられた時、「ヴェスタ」の火に仕へる巫女が處女性を失つて居たと言ふ點で生理にした事歴とを比較して見れば、如何に神聖觀念の強烈だつたかを知ることが出来る。印度文學の古代でも同様の思想が隨所に現はれて居る。「ナラ」物語中でも禊を怠つたが爲めに「ナラ」王が國を賭して争ふ賭事に、凶神に魅入られて負けた話などを見ると、神に對する非禮又は神に仕へる手續の缺陷から、戰に破れ疾患に罹ると言ふ考は大眾の道徳を維持し社會の秩序を保障する上にこの種の信仰は

必要である。

古代印度では、裁判の時に *divyam* (又は *pranāya*) (即ち *ordā*) を用ふ。我が國では應神天皇の御代九年、竹内宿禰が弟甘美内宿禰と争を生じた時、探湯クガタチの式を以て曲直を決してゐる。又允恭天皇の御宇四年、氏姓の亂れたのを正すのに、矢張探湯を用ひてゐる。(北史倭國傳) 或置小石於沸湯中。令所競者探之云。理曲者即手爛。次に印度では火は *parvata* と言つて語根 *par* から出て乃ち淨めるものゝ意味である。これは物質的にも淨めることゝ同時に道徳的にも淨めることであつて、この意味に於いて我が國のある神社で行ふ火渡の式は禊の一種である。印度では火は淨めるものであり、又神聖化するものである。我が國の昔から行はれる大祓中の祓ふこと即ち淨めることは、是神と人との間に存在する神聖な者の特權であつて、又支那で言ふ罰するとか或ひは償ふ意味でもなく、淨める意味である。故に罪は穢れたものと考へ、又罪ある者は即ち穢れた者である。これを清める爲めに用ひられた形式がある。禊するとか或は社會から淨める特

權を有すると見做された人に淨めて貰ふことである。羅馬法の *poena* と言ふ字の本來の意味は *punish* と言ふ字と共に *ヴェダ* の淨める考から來たもので、一般に考へられてゐるやうな苦痛を與へる意味でない。而してその清淨化する特權を有する階級は何れの國でも一般に宗教上又は政治上の元首である。原始佛教の本來の精神たる之と全く反した波羅提木叉 (*paṭimokkha*, *pāṭimokkha*)。即ち「お互に赦す。」の考は、語根 *mu* から來り、非違あれば互に告白し赦し合ふのであるから、原始佛教の根本精神は如何にも平等精神であつて、淨める特權階級を認めない事である。我が國では大祓の文句を味はつて見ると、原始佛教の波羅提木叉とは全く違つて、却つて婆羅門と言ふ自ら人を淨める特權ありと認めらるゝ階級の中から現はれた思想と同一なことを知り得るのである。

又、印度には「ソーマ」(*Soma*) 酒がある。波斯では *Homana* と言ひ、尊ばれた植物の名で、是から酒を造つて神に捧げるのである。「リグヴェダ」第八卷第八十の詩に於いて、「ソーマ」酒を造るのに、普通「リグヴェダ」の他

の個所に書いてある方法とは異つた方法を言つて居て、これには jambhasuta とある。(普通は「ソーマ」の草を石臼で潰してその汁から酒を造るのである。)或る處女が河に行つて「ソーマ」の草を途で得た、それを家に持歸つて言ふにはこの「ソーマ」で「インドラ」(帝釋神)の爲めに酒を造れと言つて居る。その jambhasuta とあるのは何の意味であるか。註釋者「サーヤナ」(Sayanā)はその部分を『妾の齒にて搾られたるこの「ソーマ」を飲む可し。』(jambhasutani mama dantair abhisutam imahi somani pīta)と釋し、亦泰西の學者もこの註釋者の意見に従つて譯して居るが、是は誤であつて、乃ちその字の如く齒で嚼んで醸した此の「ソーマ」を飲む可しと言ふことであると思ふ。こゝで言ふ「ソーマ」の植物は何か解らぬが、その植物から「ソーマ」酒を造ることは屢々印度文學に出て居る。「マックスミューラー」(Max Müller)は律 (lopa)と言つて居るが要するに不明である。これで酒を造るよりも他に澱粉質から酒を造つてそれを沈澱さす爲めのものではなからうか。齒で「ソーマ」から酒を醸すとは乃ち齒で

嚼むことである。魏書中、勿吉國の風習を寫すなかに、嚼米醞酒とある。日本の言葉のかもす(醸す)は古言であつて、古事記中、素戔鳴尊が八岐の大蛇を出雲國肥ノ川上で退治して稻田姫を娶らるゝ時、その大蛇退治に酒を造らしめ給ふた。その時に「八醞の酒を醸み云々。」と言つてゐる。八醞とは「繰返しかもす」意味で、醸は口で咀嚼して造ることである。尙かもすはかむの *conscience* と自分と思ふが、この點で我が國の方言學者の意見を徴したいと思ふ。古事記裏書の中に、「日本決擇云。應神天皇之代。百濟人須會己利スソコリ人名參來。始習造酒之事。以往之世。未知釀酒之道。但殊有造酒之法。上古之代。口中嚼米吐納木櫃。經日酢酸。名之爲釀。故今世謂釀酒爲嚼。是其法也。今南島人所爲如此。」とある。これに對し本居宣長は古事記傳九に「釀は酒を造るを云。古歌にこれかれ見ゆ。字鏡に釀造ノ酒也。佐介加牙サケカマと注せり。(此の加牟を口にて咬咀て作る故なりと云は、おしあてのひがことなり。加牟は和名抄に麴カムダを加無太知カムダチとあるはかびたちにて俗に花付クと云これなり。されば酒もかびだ、せて作る意にて加

牟とは云なり。故加毛須とも云り。」と断じ、平田篤胤も亦全く師説を踏襲して少しも相違する處がない。この兩者は共に「サーヤナ」と同一の誤に陥つて居る。然し此は字義通り處女に米を嚼して壺に入れて酒を醸す方法で現に琉球に於いては神事の際の神酒造りに名残を止めてゐる。それには飯を臼に挽いて桶に移して水を入れ麴を加へる時に、一村中から選ばれた美しい素行正しい處女（又は神女）が七日間齋戒した後、口で嚼んで三度桶に吐入れる風習である。

○酒をかみとは酒をかもす事。言語學者に依つて説明される。太古酒はかんで造られたから酒を造ることを「カモス」と言ふと言ふ事は琉球に於いては今に神事の際の神酒造りに名残が止められて居る。舊六月の綱曳の時や新穀を供する舊六月のお祭の折には今でも田舎の村々字々で神酒を造つて居る。先づ米をくだいて御飯に炊き夫れを臼にかけてひく。ひかれた物を桶にうつし水を加へ麴を入れて一晝夜位放置しておく。醗酵作用に依つて美味な神酒が出来ると譯である。が麴を加

へる時に一村中から選ばれた美しい素行の治つた處女（所に依つてはノロに屬する神女）が七日間齋戒して、口で嚼んで三度桶に吐入れる事になつて居る。是は正しく上古の米を嚼んで酒を造つたと言ふ遺風であつて麴が発見されない太古にあつては、唾液を以て醗酵作用を起させるために處女などを集めて全部口で嚼まして居たのであらう。今でも信州の山奥には、山葡萄で酒を醸す時、その果を口で嚼んで唾液を交ぜねば良酒は得られないとする地方があるさうである。併して造られた神酒をミキ又はウンサクウマザクと言つて神に供し、人民に頒つたのである。私が度々實見したウンサク造りはなか／＼盛んなもので、五斗入の桶が十五個も並べられて居た。晝から夜に亙るのであるから夜分になると乙女共に眠を催さしめまいとであつたらう、側で三味線を弾いて彼等の唄に合したものであつた。私は次にかゝける中巻下巻に行つて出て來る御酒つくりの歌を誦する度に會つて目のあたり見た此の光景が彷彿として偲ばれる。

△この御神を醸みけむ人は其の鼓、臼に立て、歌ひつゝ醸みけれかも、舞ひつゝ醸みけれかも、此の御酒の御酒のあやに、うたゝぬしさゝ

△かしの生に横臼をつくり、よくすに醸みし大御酒うまらにきこしめもせ食せ、まろがち。云々。

(奥里將建著琉球人の見た古事記と萬葉、七六頁)

西歴紀元十四世紀印度の「ヴィジャナガラ」(Vijayana-sara)に出たと言はるゝ「サーヤナ」の註釋には jambhasata とは單に齒で搾るとしか書いて居ないが是はいけなしい。「リグヴェダ」中には第八卷第八十の詩に唯一回しか出てゐないから、リグヴェダ時代には文字にだけ残つたので方法は既に滅んで居たものと見なければならぬ。「サーヤナ」は印度古代の傳説を集めて註釋を造つたものであるが、専ら石で搾る方法しか書いてゐない。然し我が國の素戔嗚尊と稲田姫との話を見ると、かの處女をして米を嚼まして造る方法で現に琉球に存在する風習とこの古代印度に於ける jambhasata とは同じ事と思ふ。我が國の素戔嗚尊稲田姫の神話中「やくもたついつもやえがき

つまごめにやえがきつくるそのやえがきを」の歌が結婚の時の歌であり、亦この「リグヴェダ」第八卷第八十の詩も結婚の際の歌なることを思ひ較べ、又この場合「インドラ」は尊を現はし、「インドラ」の敵「ヴリトラ」(Vritra)は大蛇なることを想ひ合せば、更に興味深いことと思ふ。もつとも劍の話は印度にはないが、かゝる神話は「リグヴェダ」では既に滅んでゐたと見る可く、却つて古事記中に殘存して記載されてゐるのではなからうか。

かくの如く、我が國の古俗と古代印度の風俗とはその文獻の有無如何に關らず、他の古代民族のと相共通した要素を持つて居る。殊に神聖觀念の強烈なことは彼我共に最も著しい所で、それを中核とする風俗習慣は如上の例を以てしても充分に窺知り得ると思ふ。印度はかゝる「ブラーフマニズム」又は「アーリアニズム」の流れに對立した佛教を生んだが、佛教は結局その民族の風俗習慣乃至信仰の埒外に追ひやられた。乃ち佛教は印度に滅んだのである。佛教が東漸し我が國に入るに及んで所謂佛教中最も「アーリアニズム」の要素を多分に有し、その清淨

思想を儀式中に具體化してゐる眞言宗が、我が國中世に於いて、皇室に永く尊信され根蒂を占めたり、又地方の豪族の間に根蒂を占めたことを見れば、その精神的内容の彼我相通する所以を明白に知ることを得やう。又輸入佛教である奈良朝時代の佛教では、我が國民の性情、我が國體、我が神代ながらの風俗習慣と矛盾することもあつたことが解る。平安の遷都と共に弘法大師の入唐の意義や、又、何故に天台宗から、慈覺、智證の如き人が入唐して、台密の基を開く必要があつたか。殊に高岳親王の如き金枝玉葉の御身を以て、佛門に歸依せられ、入唐せられ、入笠までせられて印度密教を研究せられんとした御趣意も自ら判明すること、思ふ。